図1　ヴェネツィア鳥瞰 デ・バルバリ 1500年

VI

中世ヴェネツィア年代記[1]

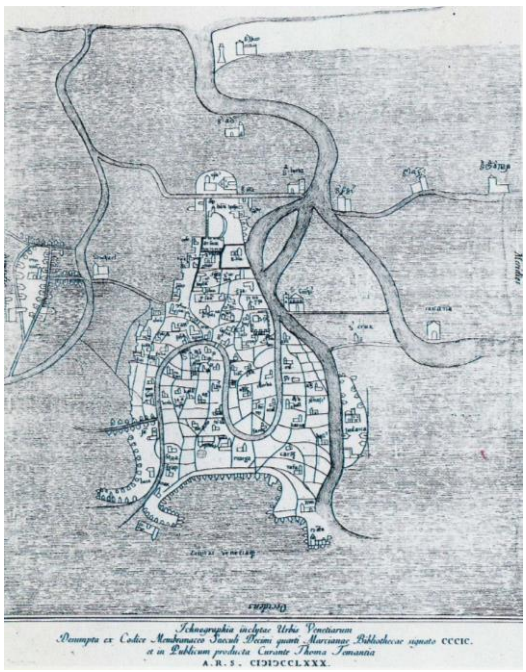

図２　最古のヴェネツィア図 12世紀[2]

ヴェネツィアは東洋と西洋の接点となった町であった。香辛料に代表される東方の産物を西に運び、毛織物に代表される西方の品物を東に運んで大をなした。その富と力はいわば胡椒の上に築かれたと言っても過言でない。ポーロもそうした商の世界の一人であった。ただこの商人は、何かのきっかけで東の果てのその原産地にまで足を伸ばしてしまった。そして帰国後、これまた何かのめぐり合わせで手記を書いたら有名になり、七百年後の今もその名が残っているというだけのことである。もっともその書は、今なお読まれるほど類い稀なものであったが。とまれ、オリエントなくしてはヴェネツィアはなく、マルコ・ポーロもまたない。さてその「マルコ・ポーロの世紀」[3]に飛ぶ前に、そこに至るまでの流れをごくかいつまんでたどっておく。

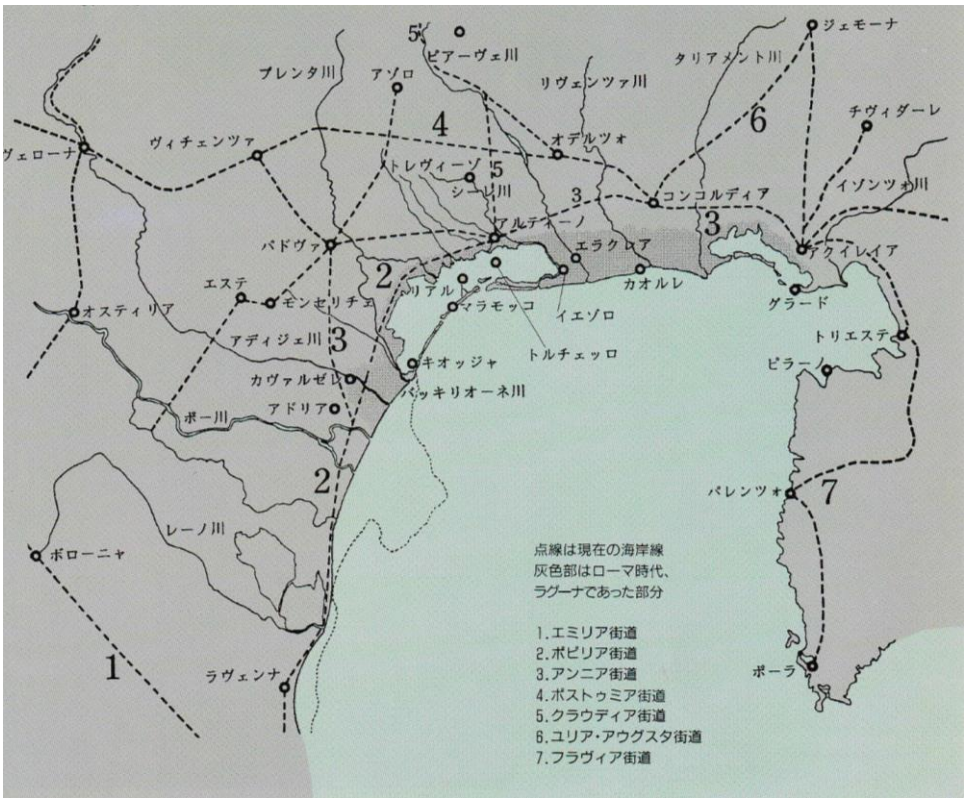

図３　ヴェネツィア周辺図（ルカ・コルフェライ『ヴェネツィア』より）

1　起源から千百年代

1.1 建国からフランクまで(421-810)

歴史に登場するのは、日本と同じくヴェネツィアもずいぶんと遅い。伝説によれば、建国は421年3月25日である。伝説でそれだから実際はもっと遅いのだが、それでもこの遅さは際だっている。ローマと比べると実に1200年近い差がある。しかもその西の帝国が亡びんとしていた頃である。つまり、ヴェネツィアの歴史に古代はない。しかしこの国としての「若さ」こそが、その後の急速な発展と1300年に及ぶ持続した繁栄の秘密であったことが分かる。この点でも、老大国中国と新興国日本の関係に似ている。

建国はともかく、その頃つまりアッティラに率いられたフン族がローマ帝国領に侵入し、東からの通り道に当たったウェネティアを襲ったとき(452)、周辺の住民がこの潟に逃げ込み、点在する島々にそのまま住み着くものもあった、というのは有り得たことであろう。フン族は知ってのとおり東方の民である。ヴェネツィアはその誕生から東方と関わっていたことになる。そうして住み着いた住民の様子は、次にやってきた東ゴート王テオドリックの秘書官であったカッシォドールスの有名な書簡(c.538)に記されている。彼らの家は「水鳥の巣」のようであったけれども、「塩と魚をとり、それを小麦と交換していた」と。実際、それ以外何もなかった。が、海と船があった。それが後のヴェネツィアを創る。

東方からの異民族の侵入はまだ続く。今度はギリシァに移ったローマの末裔ビザンティンが戻ってきて、東ゴートを追い払った(540)。彼らはラヴェンナにイタリア代表部を置き、ヴェネツィアの潟と島々も官宦ナルセスによってその管区に組み込まれた。次にやってきたロンゴバルドは、それまでの「蛮族」と違って定住しようとしたため、ヴェネト地方でもビザンティンと激しい戦いが起こり(568)、裕福な階層の人々も含めて本土から集団的・組織的な移住が行われ、島の上に本格的な都市建設が始まった。東の要衝アクィレィアも劫略され、そこにあった総大司教パオリーノも聖遺物を抱えて潟の東の

端グラードに逃げ込んだ。こうして2世紀にわたるロンゴバルドの時代が始まるが、彼らは潟には領土的価値を見出さなかったためか、ヴェネツィアは直接の占領と支配を免れた。古年代記によると、こうして住み着いた人々が集まって697年最初のドージェ（統領）パオルッチォ・アナフェスト(697-717)を選んで独立したという。[4]がこれも伝説で、実質的には独立に近かったにしても、形の上ではまだビザンティン皇帝に従属し、ドージェとはそのドゥクス（公）であり、軍事長官として市の統治と防衛の任に当たっていた。751年首都ラヴェンナがロンゴバルドに征服された後も、ビザンティン帝国領として残る。

8世紀も後半になると、いつまでも改宗しようとしないこの異教徒の蛮族を放逐するため、ローマ教会はフランクのシャルルに南下を要請した。774年フランクが勝利し、ヴェネト地方も他の北伊のエザルカート（イタリアのビザンツ領）とともにシャルルの手に委ねられた。と当然、その領土権を主張するビザンティンと衝突する。また市でも、教会の権威に従おうとする司教や本土に領地を持ちたい土地貴族を中心とするフランク派と、ギリシァとの通商関係を重んずる商業貴族を中心とするビザンティン派に分裂した。805年ドージェ・オベレリオ・アンテノレオ(804-10)はパヴィーアのシャルルの下に行って忠誠を誓ったため、ビザンティン皇帝は軍を派遣して来、彼は逃亡した。しかし810年その弟ベアートが戻ってきて反乱を起こした。その機に乗じてこの町を占領せんとシャルルの子ピピンが軍を率いて攻めてきたが、市民の激しい抵抗に会い、またビザンティンが援軍を派遣してきたので退却した。こうして親ビザンツ派が勝利し、新たにアニェッロ・パルテチパツィォ(810-27)がドージェに選ばれた。シャルルもヴェネツィアに対するビザンツの支配権を認め、皇帝ニケフォロス(802-811)と和平した。

この事件は、その後のヴェネツィアの歴史を決定づけた転機として記憶される。すなわち、フランクの領土に組み込まれて内陸に在る領主の一封土となるのではなく、本土に背を向けて島々と海を舞台にビザンティンとの関係で生きてゆくことを選んだからである。それはまた、皇帝をも君主をも戴かず、最後まで一自治都市コムーネとして、市民の共同体つまり共和国として

自由と独立を守ることを意味し、その後の発展と繁栄を自ら選び取ることになったからである。またこの頃政府機構は、外海に面したリドのマラモッコから内海のリヴォアルト(Rivoalto 高岸)今のリアルトに移され、市はそこを中心に発展し始めた。そこは潟の浅瀬と迷路のような水路に囲まれ、敵の侵入が困難だった。ヴェネツィアはその後も何度となくこの天然の防塞に救われることになる。

1.2 第1回十字軍まで(810-1096)

そして事実そのとおりとなった。背水の陣とはまさに逆に、背後の陸への退路を断って海へと漕ぎ出たヴェネツィアは、老ビザンティンと新興神聖ローマの二つの帝国の間をぬって進み、その後も立ちはだかるスラブ、アラブ、ノルマン、ジェノヴァ、トルコらを次々と退けて、ついには東地中海随一の勢力へと成長する。

まず手をつけなければならなかったのは、周辺の海の安全と航路の確保だった。バルカン半島北部の奥深くまではビザンティンの権力は届かず、アドリア海の対岸ダルマチア沿岸はイタリア側より航路に適している一方、複雑に入り組んだ海岸線と点在する島々から、特にナレンタ（現ネレトヴァ）川とラグーザ（現ドゥブロヴニク）を中心としてスラブ人海賊の巣窟となっていた。838年にはドージェ・ピエトロ・トラドニコ(836-64)自ら遠征し、一応の成果をあげたが、もちろんそれで済んだわけではない。海賊退治はその後も何度となく繰り返されなければならなかった。

アドリア海の航行を脅かすもう一つの相手はサラセン人であった。7世紀始めアラビアの地に誕生したイスラムは、瞬く間に広がって、「蛮族侵入」後の西方が混乱する間に「ローマの海」だった地中海を「アラブの湖」に変え、827年にはシチーリァ征服に取り掛かり、またイタリア半島のいたるところに襲来していた。ヴェネツィアがアドリア海でアラブ人と戦った最も早いものは836年で、この時は敗北している。

二人の商人ルスティコ・ダ・トルチェッロとブォーノ・ダ・マラモッコが、

後に市の守護聖人となる福音史家聖マルコの遺骸をアレクサンドリアから豚の肉でイスラム教徒の目を欺いてこっそりと運び来たった、との名高い伝説もこの頃828年のことである。この言い伝えが何ほどかの真実を含んでいるなら、一方ではヴェネツィア人はもうエジプトにまで進出して彼らと商売していたことが分かる。事実、「スペーツィェ」(spezie 香料)の語が初めて記録に見えるのもこの時代、853年のオリヴォロ司教オルソの遺言とされる。

本土のフランク政権とは、840年ロタール1世(795-855)と条約を結び、スラブ人に対する共同防衛とキリスト教徒を奴隷として異教徒に売ることの禁止を取り決めた。奴隷の主たる供給源はダルマチアのスラブ人だったが、それをヨーロッパやイタリア本土には家内労働力として、オリエントの宮廷には官宦や軍人として提供した。このことからヴェネツィア商品の主な一つが奴隷だったことが分かる。奴隷商売はその後も何度となく禁止されるが絶えることなく続き、ヴェネツィアの富の主要な源泉の一つをなした。もう一つの主力商品は木材で、後背地イストリァやダルマチアには豊かな森と林があった。武器に使われるためこれの輸出も禁じられていたが、木材不足に悩むシリアやアフリカのムスリムに売り、金銀で受け取ってコンスタンティノープルで東方の品々、香味料や絹織物を仕入れ、それを持ち帰って内陸部で売った。「蛮族侵入」の波の落ちついたヨーロッパは安定し豊かになり始め、上流階級には東方の贅沢品の需要が高まりつつあった。こうしてヴェネツィア人は、当時西方世界最大の市場ビザンティンとその最大の都コンスタンティノープルの中心的な商人となっていった。

いくら本土に背を向けたとはいえ、ヴェネツィア商業のもう一方の柱は、こうして東方からもたらした商品や自国の製品をイタリア本土やアルプスの彼方の国々に売りさばくことにあり、そのとき近隣諸都市との競争は避けられなかった。相変わらずヴェネツィアの主力産品であった塩の交易をめぐってコマッキォと争い、883年に侵攻したヴェネツィアは教皇ハドリアヌス3世の介入もあって撤退したが、半世紀後の932年にはこのライヴァル都市を徹底的に破壊して、ヴェネツィア湾つまり上アドリア海（ラヴェンナとポーラを結ぶ線以北）での軍事と商業の覇権を確かなものとした。

本土との関係でその後も絶えず繰り返されるのが、広大で肥沃な領地の所有というヴェネツィアではかなわぬ夢と、世襲のドゥカートあるいはシニョーレ（市領主）への誘惑である。初期のその代表的な例が、この頃の実力者だったカンディアーノ家のドージェ・ピェトロ4世(959-76)の事件にみられる。すでに潟の大地主であったこのドージェは、ビザンティンよりも本土の封建領主との関係を重視し、まず奴隷貿易を禁止し(960)、さらにサラセン人との交易そのもの、特に武器と木材の輸出を禁じた(971)。これは神聖ローマ帝国とローマ教会の意にかなうものだったが、ヴェネツィア商業界の利益には反した。また自らシニョーレと称し、オットー大帝(962-73)の姪でトスカナ侯ウーゴの姉妹ワルドラダを妻に迎えて帝室と縁を結び、親衛隊まで本土から呼び寄せた。がこれらは、本土に領土を広げヴェネツィアに封建王朝を樹立せんとする野心の現れではないかと疑われ、ビザンティンとの関係を重んずる反対派に襲われて殺された(976.8.11)。

その後しばらく続いた両派の争いをおさめ、ヴェネツィア政治を立て直したのがピェトロ・オルセオロ2世(991-1009)である。このドージェは、両派の後ろ盾となっていた神聖ローマ帝国とビザンツ帝国の双方と巧みな外交で友好を結び、等距離外交を原則として独立を守った。992年には、ビザンツ皇帝バジレウスとコンスタンティヌスから金印勅書でもって、アラブ人に対する軍事的支援を提供する代わりに、帝国内でのアマルフィやプーリァの他国人より有利な商業特権を獲得した。また神聖ローマ帝国とはその若き皇帝オットー3世(995-1002)と個人的に親交を結び、前述の事件のため前皇帝オットー2世との間で悪化していた関係を修復し、イタリア領土における伝統的特権を確認した。1000年には自らイストリアとダルマチアのスラブ人に対して遠征し、ザーラ（現ザダル）とスパラトで大勝利をあげ、さらにクルツォラとラゴスタ（現ラストヴォ）を征服した。一方サラセン人に対しては1002年と3年にはバーリ（プーリァ）からこれを追い払ってアドリア海とイォニァ海での航海の自由と安全を確保した。1004年には長男ジォヴァンニをバシレウス2世の姪マリアと結婚させ、ビザンティンとの関係をさらに深いものとした。ヴェネツィア中興の祖とも評されるこのドージェもしかし、シニォリーアの

誘惑には勝てず、自らは引退して修道院に篭もったが、位をまだ15歳だった三男オットーネに譲って世襲させた。そのオットーネ(1009-26)も王朝を志向して反対に会い、最後には追放された。こうして初期のヴェネツィアを代表した二つの有力家門の土地貴族カンディァーノ家とオルセオロ家が消え、その後に続いたのが商売で大をなした商業貴族である。

この1000年頃は、地中海全般におけるサラセン人とヨーロッパ人の勢力逆転の時期として記録される[5]。ようやく衰えを見せ始めたイスラムに対して、西地中海でもピーサが1004年にはラツィオ海岸から、1005年にはカラーブリァからムスリムを追放しているし、1017年にはサルデーニァでサラセン人に勝利し、同島征服の第一歩を印した。こうしてピーサはティッレーニァ海での優位を打ち立てつつあったが、これに対抗してジェノヴァが台頭してくるのもその頃である[6]。

ところが11世紀後半、地中海世界は突然新たなの勢力の登場を見ることになる。北から海伝いにやってきたノルマンである。強大な腕力にまかせて領土の獲得にまい進するこの「北方の蛮族」の前に、東地中海も大きく揺さぶられることになる。しかしここでもヴェネツィアは、逆に彼らを利用して自らの立場をより強固なものにしてゆくのがみられる。大聖堂サン・マルコ教会の建設もこの頃のことである(1063-71)。

まず南イタリアをビザンティンから奪い(1071-76)、シチーリァ征服に取り掛かっていた(1072)ノルマンは、次には海を隔てたギリシァに目をつけ、1081年ロベール・ジスカール率いる軍団がコルフを占領し、息子ボエモンの軍が上陸してドゥラッツォを攻囲した[7]。東方アナトリアのマンジケルトで新興のセルジューク・トルコのアルプ・アルスランに敗れて(1071)弱っていた老帝国に、このノルマンに立ち向かう力はなく、皇帝アレクシオス1世・コムネノス(1081-1118)は、先代のミカエル7世ドゥーカス(1071-78)の妹テオドラを妻としていたドージェ・ドメニコ・セルヴォ(1071-84)に援軍を求めた。ノルマンにアドリア海の入り口を抑えられ封じ込められることを恐れるという点で利害の一致したヴェネツィアは艦隊を派遣し、海では勝利してこれに応えた。が、陸ではノルマンの攻囲が続き、ドゥラッツォは陥落した。彼らはそ

こから旧ローマ街道を進軍してコンスタンティノープルに向かったが、1085年夏のロベールの突然の死で首都は征服を免れた[8]。

この軍事力提供の見返りとして1082年、金印勅書でもって皇帝は、シリアから北ギリシァに至る帝国全土の32の主要都市における商業活動の完全な自由と税の全面的免除という特権をヴェネツィアに認めた。また、金角湾沿いの一角がヴェネツィア人居留地として譲られた。ビザンティンはそれまで対外貿易を厳しく統制し、外国商人に対してはその滞在をコンスタンティノープルにかぎり3カ月以内でのみ認め、しかも高い関税を課していた。一方各地の豪族や商人たちは、自領の産物や穀物の自由貿易を強く望んでいた。この免税特権と専用の埠頭の付いた居留地の獲得は、ヴェネツィアにとってその後のレヴァンテ（東地中海沿岸地域）での飛躍の大きな礎石となった。

1.3 第2回十字軍まで(1096-1202)

12･13世紀は、西欧にとっては十字軍の時代である。それは、侵入してきた「蛮族」たちによって西ローマ帝国の故地に建てられ、イスラムに地中海から締め出されることによって成立したというヨーロッパが初めて試みた冒険であった。成人した若者ヨーロッパの最初の武者修行と言ってよい。あるいは国際社会の晴舞台への最初の登場である。これによって彼らは初めて海外領土を獲得するのだが、それは後の歴史において拠点として大きな役割を果たす。また、異教徒からの聖墓の奪回という理念と、見境いない征服と略奪という現実は大きく食い違ったけれども、西ヨーロッパはこれによって「世界」を発見し、見聞と経験を積み、そして自信をつけたのだった。現に、それが始まった11世紀末とそれが終わった13世紀末では、ヨーロッパはその姿を一変させている。12世紀ルネサンスをもち、農業を改革し、13世紀には商業と工業の大きな発展を見て、イスラムとの力関係は逆転してゆく。そして14世紀の困難な時期を乗り越えて、ルネサンスの花を咲かせ、近世を準備してゆくのである。十字軍運動は、その原因よりは結果であったが、支配者であった騎士の時代の心性を代表していた。

主舞台となったのは今度も東地中海、レヴァンテであった。そこに登場するのは、ヨーロッパ側では西からイングランド・フランス・神聖ローマ帝国ドイツとその騎士たち、ギリシァの老帝国ビザンティン、東はシリアのアラブ諸国、南のエジプトとマグレブ諸国である。そしてその真ん中にあったのがイタリアである。イタリア側の主役は、この頃各地で成立しつつあった自治都市国家コムーネ、とりわけ海洋都市の地の利を得たピーサ・ジェノヴァ・ヴェネツィアの三都市である。そしてヴェネツィアはここでもこの運動を利用して自らの立場をより強固なものにし、発展の礎を築いてゆく。すなわち、ビザンティンの用心棒兼御用商人の地位から独立し、主人を倒し、東地中海随一の勢力へと上昇してゆくのである。しかし他方では、この運動によって呼び込まれたライヴァル都市によってレヴァンテ商業の独占的優位を脅かされ、その後の激しい競争を経なければならなかった。

最初はしかし、ヴェネツィアはこの運動に対して懐疑的だった。巡礼と呼ばれる十字軍士たちが帝国領土を荒らすのを憂慮するビザンティンに対して、市は前の1082年の条約でこれを防備する義務を負っていたし、せっかく築き上げてきたサラセン諸国との通商関係が破壊されるのを危惧したためである。1099年ロードス島に向かったドージェ・ヴィターレ・ミキェル1世(1096-1102)の子ジォヴァンニ率いる船団は、前年コルフ島を占領した後そこにやってきたピーサ隊と衝突してこれを破り、ピーサ人がビザンツ領内で通商することを禁じて帝国との約束と独占を守った。ところがヴェネツィアは、ジェノヴァとピーサがこの巡礼たちのオルトレマーレOltremare(十字軍によってラテン国家が建設されたシリア・パレスティナ地域）への輸送で大儲けし、またノルマンのボエモンによるアンティオキア(1098)、エルサレム(1099)占領を始めとして各地で支援して植民地を手に入れるのを見て考えを変え、1100年のゴドフロワ・ブイヨンのアークレとヤッファ攻撃には200隻の大艦隊を派遣して加わり、今後征服される各都市に土地と教会を譲り受ける権利と免税特権を確保した。しかし全体としては、とりわけジェノヴァが得たものと比べると大きく劣り、後の対立の種を残した。

その後も十字軍による1122年のエルサレム、1124年のテュロス攻撃に支援

軍を派遣して、植民地と商業特権を獲得した。となると、ビザンティンとの関係は当然悪化する。領土を荒らされたうえサラセン人との交易を妨害された次の皇帝ヨハンネス2世コムネノス・カロージャン(1118-43)は、前の特権を停止する動きを見せた。そこでドージェ・ドメニコ・ミキエル(1118-30)はエーゲ海とアドリア海の島々を次々と略奪し、またコンスタンティノープルから自国商人を引き揚げさせてビザンツ商業に打撃を与えた。なすすべもなく皇帝は、1226年再び金印勅書で特権を更新した。今や、ビザンティン帝国の安全と商業は全くヴェネツィアに依存していることが明らかとなり、かくて立場は逆転した。となると、ヴェネツィア人に対するギリシァ人の怒りと憎しみはさらに募る。

1147年、ギリシァ征服の夢を捨てぬノルマンのルッジェーロ2世(1130-54)が再びコルフを占領したときは、次の皇帝マヌエル1世コムネノス(1143-80)の要請に応えてヴェネツィアは防衛軍を派遣したが、それでもノルマン軍は内陸部に侵入して各地を荒らした。これでビザンツとの関係はさらに悪化した。マヌエルは、ルッジェーロ2世の死(1154)に乗じて翌年にはイタリアに侵攻し、南部東海岸を占領した。これにはヴェネツィアも、神聖ローマ帝国が中心となって結ばれた対ビザンティン同盟に加わって対立した。

ヴェネツィアに対抗さすべくかつて皇帝アレクシオス1世は1111年ピーサにも特権を与えていたが、1155年マヌエルはジェノヴァ人にも門戸を開き、2年後には通商条約を結んでコンスタンティノープルの一地区を与えた。かくてヴェネツィアの独占は終わり、帝国領で3都市が争うかたちとなった。1162年にはピーサ人とジェノヴァ人が衝突し、相互に略奪しあった。諸悪の根源はヴェネツィアと見たマヌエルは、1171年3月12日コンスタンティノープルから全てのヴェネツィア人を追放し、財産を没収した[9]。この頃すでに1万人前後のヴェネツィア人が住んでいたと言われ、コンスタンティノープルは今やヴェネツィアの植民地のような様を呈していた。市は遠征軍を組織し、ドージェ・ヴィターレ・ミキエル2世(1156-72)が自ら率いたが成果なく帰国し、怒った民衆に襲われて殺された。かくてヴェネツィアはしばらくビザンツから離れてシチーリァ王やエジプトのスルタンと条約を結び、他に転進するこ

とになる。が、そこから思いがけない結果が生まれる。

この頃登場していたのが神聖ローマ帝国のフリードリヒ1世(1152-90)だった。イタリアの地に帝国の権威と権利を主張するこのバルバロッサに対して、都市の自治を守ろうとする北伊コムーネ諸市はロンバルディーア同盟(1167)を結成して抵抗した。ヴェネツィアももちろんこれに加わったが、財政的に支援しただけだった。一方1172年のイタリア本土に残るビザンツ都市アンコーナ攻撃には、神聖ローマ皇帝を支援して海から攻撃を加えた。この等距離外交によってヴェネツィアは、教皇に支援されていた北伊都市と皇帝との仲介者の役割を果たすこととなり、両者の和平交渉の地として選ばれる。レニァーノの戦い(1176)での都市同盟側の勝利の後、翌1177年6月24日にはフリードリヒ1世とアレクサンデル3世(1159-81)が、ヨーロッパ各国の王侯・貴族・高位聖職者の見守る中サン・マルコで歴史的な出会いをもち、ヴェネツィアの国際的な地位はさらに高まった[10]。また実質的にも、神聖ローマ帝国領全域における皇帝税の全面免除を獲得し、ヴェネツィア人は二つの帝国の御用商人となった。一方では、こうして激化してゆく陸での帝国・教皇・諸都市の三つどもえの争いの間に、海での支配を掌中にしてゆく。

その間にビザンティンは、1176年のミリオケファルムの戦いで再びセルジューク・トルコに大敗し、小アジアの領土を大部分失っていた。その結果、防衛の任を任されていた、今やヴェネツィアに代わってコンスタンティノープルの主役となっていたジェノヴァとピーサに対する感情は悪化した。ヴェネツィア人を追放したマヌエルの死(1180)後摂政となっていた従兄弟のアンドロニコス1世コムネノス(1183-85)は、幼少(11歳)だったその子アレクシオス(1180-83)を殺して2年後帝位に就いた。ラテン人嫌いの彼は、今度はジェノヴァとピーサの植民地を襲撃させ、居留民を皆殺しにした。一方内政でも恐怖政治を敷き、有力貴族を弾圧し多数を粛清した。そのため、貴族たちは南イタリアのノルマンに救援を求めた。そこでシチーリァのグリェルモは、ビザンティンを征服すべく再び1185年ドゥラッツォに上陸し、サロニカ（テサロニキ）を抜いてコンスタンティノープルに迫った。このニュースに、その蛮行を快く思っていなかった市民は暴動を起こし、アンドロニコスを殺し

た。こうしてコムネノス朝が終わり、次にイサキオス2世アンゲロス(1185-95)が即位し、彼の下に結集したギリシァ人によってグリェルモは敗退した。この機を見逃さずヴェネツィアは使節を派遣して1187年条約を結び、再び元の地位に返り咲いた。ところがそのイサキオスは10年後の1195年弟のアレクシオス3世によって眼をくりぬかれ、帝位を奪われた。この政変劇が次の十字軍で大きな意味をもってくる。

他方パレスティナでは1187年エルサレムがサラディンによって奪回され、アークレとラディオケアも陥落した。これに対して結成された第3回十字軍にはヴェネツィアは、関係を修復したばかりのビザンティンを刺激せぬよう、積極的には動かなかった。しかしアークレはジェノヴァとピーサによって取り戻され、ヴェネツィアもその分け前に与った。またこの遠征の途次物故した(1190)フリードリヒの子ハインリヒ6世(1191-97)は父の結婚政策によって南イタリアの王位継承権を手に入れており、1194年にはシチーリァに遠征して王位に就いた。かくてついにノルマン王朝は幕を閉じ、南イタリアは神聖ローマ帝国の領土となった。

こうして勢力を伸ばす皇帝に支援されて、イタリア随一の「帝国都市」ピーサはティッレーニァ海でジェノヴァを破り、アドリア海にまで進出してくる。これを迎え撃ってヴェネツィアは1196年アルミーロ沖で衝突し、モドーネで勝利してレヴァンテでの優位を守った。ハインリヒ6世も当然のごとくギリシァ征服を狙っていたが、1197年シチーリァ滞在中メッシーナで突然没した。その後しばらく神聖ローマ帝国は、ハインリヒ6世の弟フィリップと、新教皇インノケンティウス3世の推すウェルフェン家のオットー4世の間で後継争いにもめ、前者の死(1208)でようやくオットー4世が帝位に就いた。が、その後継争いに端を発したギベッリーニ（皇帝派）とグェルフィ（教皇派）の争いは熾烈化の一途をたどり、各都市を巻き込まずにはおかなかった。本土から距離をおくヴェネツィアはここでもそれに関わることを極力避け、力を海に注ぐことができた。

1198年36歳の若さで教皇となったインノケンティウス3世(1198-1216)は、就位するとすぐ十字軍を呼び掛けたが、フランスのフィリップ・オーギュス

トとイギリスのリチャードはアキテーヌ公領をめぐって争っており、またもはや大儀名分の色あせた遠征に応じる者は少なかった。ところがシャンパーニュで行われた馬上槍試合が説教士ヌイイのフルクの登場で巡礼への熱狂と化し、さらには十字軍に参加した者は罪障ことごとく消滅するという免罪の大判振る舞いによって、フランク騎士たちはこぞって「十字の御印を身に付ける」こととなった。出航地としてヴェネツィアが選ばれ[11]、1201年2月6人の全権団が派遣されてき、高齢のドージェ・エンリーコ・ダンドロ(1192-1205)との間で交渉がまとまり、「征服記」で名高いジョフロワ・ヴィルアルドゥアン(c.1150-1218)がサン・マルコ大聖堂に集まった全市民の前で格調高く演説し、感極まった民衆は歓呼してこれに応えた。かくてヴェネツィアは、銀8万5千マルクで十字軍士3万5千の輸送を請け負うこととなった。（その後この十字軍がどのような経過をたどり、その中でヴェネツィアがどのような役割を果たしたかは、諸説あるが、多くの書に詳述されるところなので省略する。[12]）

2 千二百年代

第4回が、ヴェネツィアのヴェネツィアによるヴェネツィアのための十字軍となったことは、結果的には否定すべくもない。このアドリア海の小都市は、実質的にコンスタンティノープルの支配者となったばかりでなく、その間にレヴァンテの航海上の拠点を抑えて東地中海商業での優位を揺るぎないものとし、その後の大発展の基礎を据えたからである。

2.1 ラテン帝国崩壊まで(1202-1261)

1204年4月13日戦闘が終わり、成ったばかりのラテン帝国の皇帝を選ぶ選挙が5月9日、十字軍とヴェネツィア双方6人ずつ12人の代表によって行われた。ヴェネツィア側は、広大な帝国の支配は共和国の手に余るとみてドージェ・ダンドロは辞退し、十字軍側の推す名目上の総隊長だったボニファーチ

ォ・ダ・モンフェッラートは神聖ローマ帝国やジェノヴァとの同盟者だったからこれにも反対し[13]、結局フランドル伯ボードゥアンを推薦して7対5で決定した。

領土の分割については、征服前の3月に基本原則が合意されており、新皇帝に全領土の4分の1を認め、残りを十字軍とヴェネツィアで等分するつまり8分の3ずつ分ける、というものだった。これに基づいて双方12人ずつの委員によって具体的な線引きが行われ、ヴェネツィアは内陸領土よりも、海上交易の基地とすべく、アドリア海からコンスタンティノープルへの航路に当たる地域を抑えるという方針で臨んだ。首都コンスタンティノープルの8分の3は金角湾沿いブラケルナイ宮殿にかけての最良の地区、トラキアではヘラクレーアからシゴポタモス（ガッリーポリ半島）にかけての海岸地域、そしてマルマラ海からアドリアノポリスに至る内陸部。グレーチァは西部つまりアドリア海東岸のアルバニア、エピロス、アカルナニア、エトリア。ペロポンネソス半島も西半分。エウボエア島（ネグロポンテ）は両端（オレオスとカリストスの要塞）。ザキントス、ケファロニア、レウカデア、コルフのイオニア諸島。さらにアンドロス、エギナ、サラミナの諸島である。その上、皇帝に選ばれなかった側として大司教を出す権利と聖ソフィア寺院を得た。また、帝国全土での関税と税金の完全な免除と、敵対状態にある国の人間が帝国領土に足を踏み入れることの禁止を勝ち取った。ボニファーチォ侯にはテサロニカ、アテネ、アッティカ、ベオツィア、コリンツィァなど、諸侯にはテッサリァ、マケドニァの一部、トラキアなどが分与された。

これらはしかしあくまで机上の分割で、現実に征服するという困難な仕事が残っていた。最初は順調そうだったが、やがて各地で亡命したビザンツ人と土着の君侯から激しい抵抗を受けることになる。トラキアではギリシャ人はブルガリア皇帝カローイァンと同盟し、エピロスではイサキオス2世とアレクシオス3世の従兄弟だったミハイル・ドゥーカス・アンゲロスが支配を固めつつあった。小アジアでもテオドロス・ラスカリス(1204-22)が対岸のニケーアに政権を建て、亡命者を集めた。事実60年足らず後、ラテン帝国は彼らによって幕を引かれることになる。早くも初代皇帝ボードゥアンは1205年(4.1

4)、自分に分割されたマケドニアとトラキア遠征中ブルガリア人に捕まったまま行方不明となった。続いてドージェ・ダンドロも、アドリアノポリスからロドスタにかけての征服戦を指揮している最中に没した(1205.6.1)。90歳を越えていたと言われる。ボニファーチォも1207年9月ブルガリア人の手にかかった。

ドージェを失ったコンスタンティノープルのヴェネツィア人は、6月中にすぐ自主的にポデスタ（行政長官）に、分割協議メンバーの一人だったマリーノ・ゼーノ(1205-07)を選んだ。同年8月5日本国で選ばれた新ドージェ・ピェトロ・ジァーニ(1205-29)は、この動きを警戒してラテン帝国のポデスタを共和国の支配下におくため直ちに措置を講じ、「ロマーニァの4分の1と半分の統治者」の称号は本国の元首が唱えることとした。またポデスタも本国派遣とし、ゼーノの死後1207年には次のポデスタとしてオッタヴィァーノ・クェリーニ(1207-09)を送った。コンスタンティノープルに分離独立の動きがあったとしても、ごく僅かな期間だったと見られる。もはや帰らぬ人となった皇帝ボードゥァンの後には、1206年8月20日弟のアンリが就いた。

ヴェネツィアがその権利を認められていたコンスタンティノープル大司教にはトンマーゾ・モロジーニを選んだのに対し、教皇インノケンティウス3世は最初これを拒否したが、後に承認した。島嶼部の征服は、その維持に巨費がかかることを見込んで、領土所有ではなく海上交易に有益な港を領有するという方針で臨み、その第一陣として、1205年5月大司教に選ばれたモロジーニを送って行く役目を兼ねた、ドージェの子ラニェーリ・ダンドロとルッジェーロ・プレマリンに率いられた遠征隊が途中まずドゥラッツォを占領し、次いでジェノヴァ人海賊レオーネ・ヴェトラーノの支配下にあったコルフを征服した。翌1206年にも、取り戻されていたコルフでヴェトラーノを捕らえて殺し、続いてペロポンネソス半島南端の海の要衝モドーネ（モドン）とコローネ（コロン）[14]を征服し、クレータに向かった。

クレータ島は、最初十字軍が担いだ皇帝アレクシオス4世(イサキオス2世アンゲロスの子)がボニファーチォに、自分を帝位に就けてくれれば譲ると約束していたものだった。ヴェネツィアは、彼がそれをジェノヴァに売ることを

恐れた。1204年夏始まった征服戦で、皇帝はまずテサロニカを占領したが、しかしそこはボニファーチォも所有権を主張していた土地であり[15]、彼はディディモティコンに陣を構えて対立した。そこでドージェが介入し、テサロニカを皇帝に譲るかわりにボニファーチォには、ヴェネツィア領に決定していたギリシァ南部（アルゴス、ボエチア、コリントス、エウボエア）と千マルクを提供し、彼がロマーニァに有していた権利全てを買い取った。艦隊を持たないボニファーチォにとっては、クレータは取引の材料でしかなかった。しかし島はすでにジェノヴァ人海賊の巣になっており、1206年にはマルタ伯エンリーコ・ペスカトーレがジェノヴァのためにこれを占領していた。

1206年の遠征隊は示威だけで終わり、翌年ようやくカンディアを占領したが、その征服の指揮に当たったダンドロの子ラニェーリは命を落とした。1209年にはジァコモ・ティェポロが初代カンディア公として着任した。ペスカトーレがヴェネツィアと条約を結んで全島を譲ったのは、ようやく1211年のことである。その年から植民が始まり、首都カンディアと周辺地域を除いて最終的には132人の騎士と408人の歩兵に分割して与えられた（歩兵の領地は騎士の6分の1）。しかし領土の大部分はビザンツ貴族の手にあり、ティェポロの下に進められた征服戦は激しい抵抗に会った。1219年に一応完了したが、その後も何度となく反乱する。しかしこの島は、レヴァンテに占めるその絶好の位置からまさにヴェネツィアの発展の前進基地となる。

これらに対して、他の島々の征服は個人の手に任された。前ドージェ・ダンドロの孫マルコ・サヌードは、1205-7年にかけてナクソス、パロス、シフノス、ミロス、アモウゴス、シラ、イオスの島々を征服し、アルチペラゴ公を名乗った。住民はトルコやジェノヴァの海賊からの保護を期待してこれを歓迎したという。マリーノ・ダンドロはアンドロス島、アンドレーアとジェレミアのギジ家の二兄弟はティネス、ミコノス、西スポラディス諸島、ジァコモ・バロッツィはサントリノス島、ジォヴァンニ・クェリーニはスタンパリァ、マルコ・ヴェニェルはケリゴス、ジァコモ・ヴィアーロはケリゴットス、フォスコロはナンフィオス、フィローカロ・ナヴィガイオーソはレムノスをそれぞれ領有した。半世紀余りして失われたコンスタンティノープルに

対して、これらの島々の大部分は、事実上独立することが多かったとはいえ、さらに3世紀近く自治領として残り、ヴェネツィア商業の発展に寄与する。

エピロス、アカルナニア、エトリアは結局ミカエル・ドゥーカス・アンゲロス・コムネノスの手に落ち、彼はドゥラッツォからコリント湾に至るエピロス君侯国（デスポタート）を形成したが、1210年彼はヴェネツィアと交渉し、その領土を安堵する一方、共和国の保護下に入り、市に商業の自由を保証した。

ペロポンネソス半島はシャンリットのギョームによって征服され、アカイアあるいはモレーア君侯国と呼ばれた。ギョームは3年後に死亡したが男系の跡継ぎがなかったため、かのシャンパーニュ藩の家老ヴィルアルドゥアンの甥ジョフロワが継承した。ヴェネツィアは1209年特使ラッファエーレ・ジェーノを彼の下に派遣し、その統治を認める代わりに全半島をドージェから封土として与えられる形とした。エウボエア島は、分割案では両端はヴェネツィアのものだったが、中央部を譲られたボニファーチォによって1205年春占領された。彼はそれをすぐ8月に3分割し、3人のヴェローナ貴族ラヴァーノ・ダッレ・カルチェリ、ペコラーロ・ペコラーリ・ディ・メルカヌォーヴォ、ジベルト・ダ・ヴェローナに売り払っていた。その後大部分がラヴァーノ・カルチェリの手に帰し、彼は1209年ヴェネツィアの家臣となり、貢納の義務と引換えに島を封土として授けられた。

かくてコンスタンティノープルとこれらの島々を拠点として、あらゆる方向へのヴェネツィア人の商業活動が始まる。ネグロポンテは穀物と木材の中継地、ペロポンネソスは絹の生産地であり、それまでは禁じられていたボスポラスから黒海沿岸の港や町への通行が可能となった。特にクリミア半島ではソルダイアが1206年から早くも交易の中心となり、そこから小麦・塩・魚・毛皮・奴隷が輸出された。ヴェネツィアの産物の輸出も増え、なめし皮・毛織り物・ガラスが加わった。産業はまず造船、そのための麻綱があった。農産物はパダーナのみならず南ロシアからも来るようになった。しかし一方では、キリキアとシリアでジェノヴァとの競争が激化した。

2代目皇帝アンリは優れた騎士だったが、1209年ニケーアにテオドロス・

ラスカリス(1204-22)のギリシァ人政権が誕生することを阻止することができなかった。1211年にこれを攻めたが失敗し、1214年ニンフェオで休戦条約を結んだ。エピロスでも敗退し、1216年6月40歳で突然死亡した。この後皇帝に人を得ずして、帝国の衰退が始まる。後継に義弟ピェール・ド・クートネが選ばれ、1217年始めフランスを発ち、ブリンディジからドゥラッツォに上陸し、陸路コンスタンティノープルに向かったが、アルバニア山地でエピロス王に捕らえられ、そのまま帰らぬ人となった。その後は妻のイォランドが1219年9月の死まで務め、さらにその後次男のロベールが選ばれ、摂政にフランドルのコノン・ド・ベチュヌが就いた。ロベール・ド・クートネは1221年3月25日新大司教マッテオの手で戴冠した。

ヴェネツィアはそれでもコンスタンティノープルの維持、植民地支配の強化、商業の発展の方針を変えなかった。しかし他方でジェノヴァとも敵対関係を継続することの困難を認め、1218年には条約を結んで休戦し、ロマーニァ帝国領への参入を認めた（ピーサに対しては1206年）。この休戦はよく続き、海賊行為は止み、ヴェネツィアは帝国の防衛と海上航路の確保に力を注ぐことができた。エジプト、ニケーアの皇帝(1219.8)、セルジュークのスルタンらと条約を結んだのもこの頃のことである。

エピロスは、1215年ミカエル・ドゥーカスから庶出の弟テオドロス・アンゲロスに代わっていたが、彼は1218年テサロニカを攻囲した。そこはボニファーチォの未亡人マルギット（かつてのイサキオス2世の妃、ハンガリア王ベーラ3世の妹）が、末子デメトリオの代わりに治めていたが、彼女は1223年降伏した。テオドロスはこうしてエピロス皇帝となったが、1230年ブルガリア人に敗れ、この間にニケーアが伸長した。

ニケーアでは1222年ラスカリスが死亡し、娘婿のドゥーカス・ヴァタツェが継いでヨハンネス3世(1222-54)となった。ラテン人はラスカリスの兄を応援したため戦闘状態となったが敗れ、1225年にはニコメディアを除く小アジアの領土を全て失った。ヴァタツェは余勢をかってトラキアに派兵、ランパスコとガッリーポリを占領した。ラテン帝国はこの頃には、コンスタンティノープルとその周辺のみを残すばかりとなっていた。しかもその首都は、テ

サロニカを征服した(1223)テオドロスの攻勢を受けていた。そこへさらにブルガリア王イワン2世アーセンが登場した。

コンスタンティノープルでは1228年に皇帝ロベールが死亡し、子のボードゥァンが継いだが、まだ幼少だったため、摂政としてエルサレム王ジャン・ド・ブレンヌが指名され、生涯共治皇帝の称号を認められた(-1237.3)。

本国では1229年、こうしてロマーニァ体制を確立した功労者ドージェ・ピェトロ・ジァーニが没し[16]、後任に初代カンディア公を8年間(1209-16)とコンスタンティノープルのポデスタを2度(1218-20, 1224-27)務めたイァコポ・ティェポロ(1229-49)が、その経験を買われて選ばれた。彼は、本土を席巻していた教皇と神聖ローマ皇帝フェデリーコ2世(1220-50)の対立に巻き込まれるのを避け、ジェノヴァと良好な関係を保って、全力をロマーニァの経営に注いだ。しかし、彼と前ドージェの間には生前対立があったと伝えられる。ジァーニは、ティェポロを庶民党派で貴族党派ではないと考えたからである。後者を代表したのは、かのエンリーコ・ダンドロの甥でコンスタンティノープル征服に功績のあったマリーノ・ダンドーロだった。古年代記によると、40人によるその選挙は同数で、最後は籤で決められたと言う。そのため、次の選挙からは41人によって投票されることとなった。この党派の対立と有力家門の不和は、その後の市政に少なからぬ影響を及ぼすようになる。

1235年ブルガリアのイワン2世がニケーアと同盟し、コンスタンティノープルを攻撃した。ポデスタのテオフィーロ・ゼーノは市に救援を要請し、25隻が駆けつけて勝利した。翌年の攻撃に対しては、モレーア君主ヴィルアルドゥアン2世とジェノヴァ、ピーサの協力を得て勝利した。その後イワン2世はニケーアの強大化を恐れてヴェネツィア人と同盟を結び、1241年に死亡した。一方ラテン帝国では1237年にブリェンヌが死亡し、ボードゥァン2世が単独の皇帝となった。財政的にますます困窮する帝国のため、新皇帝は支援を求めてヨーロッパ諸国を歴訪した(1237-39)が得られず、征服時の戦利品だったクリストの茨の冠を抵当にポデスタのアルベルティーノ・モロジーニ、次いでヴェネツィアの銀行家ニコロ・クィリーノに多額の金を借りた。が結局それを返済することはできず、この著名な聖遺物はそれを肩代わりしたル

イ9世のものとなってフランスに渡った。

ヴァタツェはコンスタンティノープルには侵攻して来なかったが、領土を拡張していった。1242年テサロニカ王国を終焉させ、4年後モンゴルの脅威がニケーアにも及んでくると、再びバルカン半島に進出し、1246年12月ブルガル人からテサロニカを、さらにジェノヴァ人からローディを奪った。ボードゥァン2世は1244年から4年間再び西欧行脚に出向いた。さらに今度は唯一の子フィリップを抵当にヴェネツィア人から借金をし、フィリップはヴェネツィアに留め置かれた[17]。

一方イタリア本土の状況もフェデリーコ2世の登場によって大きく流動していたが、ここでもヴェネツィアは伝統的な等距離外交を旨とすることになる。フェデリーコ2世はアドリア海にも食指を動かし、それに応じてまずアンコーナ、ザーラ、ポーラがヴェネツィアに反旗を翻した。1232年3月には皇帝自ら共和国にやって来、帝国内における通商特権を確認しその拡大を約束する一方、ローマ教皇と北イタリア諸都市（ミラーノ・パドヴァ・ヴィチェンツァ・トレヴィーゾ）が結んだ新ロンバルディーア同盟(1226.3)に対する中立的立場を放棄するよう説得した。が、忠誠を求めたわけではなかった。ヴェネツィアにとっては北伊諸都市との通商関係の方が大事であり、また何よりも争いに巻き込まれることを避けたかった。

が、1236年皇帝に支援されたエッツェリーノ・ダ・ロマーノがヴェローナを取り、ヴィチェンツァを征し、すぐ北の町トレヴィーゾに迫ったときは、ヴェネツィアは皇帝と対立する教皇の側に立った。フェデリーコ2世に支援されてヴァターチェがアドリア海に現れたからである。1238年11月には、グレゴリウス9世(1227-41)の仲介でジェノヴァと9年間の反帝国攻守同盟を結んだ。1240年皇帝に支援されたフェッラーラで内乱が起こったとき、ヴェネツィアは教皇の求めに応じて船団を出したけれども、それ以上首を突っ込むことはしなかった。勝利したエステ家はその後、アドリア海におけるフェッラーラ商業の支配をヴェネツィアに認めた。インノケンティウス4世(1243-54)がリヨンで開いた公会議(1244-45)にはヴェネツィアも使節を送り、彼らは帰路ギベッリーニのサヴォィア公の帝国軍に捕られられたが、フェデリーコ2

世はこれを釈放させた。その皇帝も1250年プーリァで突然没し、イタリアでの神聖ローマ帝国勢力は衰えてゆくことになる。これでヴェネツィアはしばらく海外領土の経営に全力を入れることができた。「イタリア随一の帝国都市」ピーサのその後の衰退と敗北もこうした情勢と密接に関わっているが、その分ジェノヴァの脅威が増すことを意味した。

ニカエアではヴァタツェが1254年に死亡し、後を継いだその子テオドロス2世ラスカリスも1258年8月に死亡し、まだ幼かった(7歳)その子ヨハンネス4世が帝位に就いたが、クーデターによってミカエル8世パライオロゴス(1259-82)が摂政・共治皇帝となり、実権を握った。

ヴェネツィアでも1249年ドージェ・イァコポ・ティェポロが没し、マリーノ・モロジーニ(1249-53)が選ばれた。このおり、ドージェの子が要職に就くことが禁じられた。ドージェの官僚化とシニォリーア化への阻止がますます進んだことになる。この海の総指令官出身のドージェの治世は、1253年ラニェーリ・ゼン(1253-68)と交代するまで平穏だった。1256年6月にはマルコ・バドエルに率いられたヴェネツィア軍によって、パドヴァが僭主エッツェリーノ・ダ・ロマーノ(1259死)から解放された。バドエル家はその後同地に所領を獲得して本土部に勢力を張り、後の1310年のティェポロの陰謀に荷担することになる。またこの頃から、それまで比較的平穏だったジェノヴァとの関係が悪化する。

アークレでは1258年、両市民の喧嘩から端を発し、一教会と僧院の所有をめぐって争いが起き、ジェノヴァ人はヴェネツィアの船を略奪し、同地区に放火した。これに対して、かつてのドージェの子ロレンツォ・ティェポロ指揮の船がジェノヴァ人区を荒らした。テンプル騎士団・ピーサ・プロヴァンサル人はヴェネツィア側、土地の諸侯はジェノヴァ側について対立は深まった。ヴィテルボで教皇による仲裁が始まったが遅すぎ、ジェノヴァ人はキプロスからガレー船を送ってネグロポンテを荒らし、クレータ島からのヴェネツィア艦隊は黒海沿岸のジェノヴァ基地を略奪した。6月24日ついにアークレ沖で大規模な衝突にいたり、ヴェネツィアは25隻を拿捕し、ジェノヴァ植民地を略奪した。死者・捕虜1700に上ったこの第1次ジェノヴァ戦争は、こう

してヴェネツィアの勝利に終わった。

一方ギリシァでは、エピロスとニカエアの対立が頂点に達していた。1257年エピロス君主ミカエル2世はテサロニカに兵を進め、コルフとドゥラッツォを所有したシチーリァ王マンフレーディ、及びアカエア君主ギョーム・ド・ヴィルアルドゥアンと同盟した。しかし1259年ニカエアのミカエル・パライオロゴスはマケドニアのペラゴニアでその同盟軍を破り、アカエア君主を捕虜とした。こうしてエピロスを倒し、コンスタンティノープルへの障害を取り除いていた。この状況を見てボードゥアン2世は、再びヨーロッパ諸国にラテン帝国の危機を訴えた。しかし、教皇アレクサンデル4世はイタリア問題でホーエンシュタウフェン家との対立に忙しかった。結局頼るのはヴェネツィアしかなかったが、ヴェネツィアはジェノヴァとの戦いに手を取られ、最後のポデスタとなったマルコ・グラデニーゴの要請に応じて1259、60年と資金を送っただけだった。

1260年春、ミカエル・パライオロゴスは内通者を使ってコンスタンティノープルを奪おうとしたが失敗した。この状況を見て、先の敗戦の報復を狙うジェノヴァは同年末二人の使者をニカエアの彼の下に派遣し、同盟を提案した。1261年3月13日ニンフェオで条約が結ばれ、7月10日ジェノヴァで批准された。50隻の軍事支援と引換えにパライオロゴスは、帝国内でヴェネツィア人が享受していると同じ特権を与えるほか、アナトリアと黒海での貿易の独占をジェノヴァ人に約束した。

これに基づいてジェノヴァはすぐ16隻を派遣したが、その必要はなかった。7月下旬ミカエル8世は、将軍アレクシオス・ストラテゴポウロスと800人の兵士をトラキアに派遣し、途中コンスタンティノープルに寄って威嚇するよう命じた。その日、30隻のヴェネツィア艦隊はマルコ・グラデニーゴに率いられて黒海のニカエア領ダフヌシア島に遠征していた。近くまで来てコンスタンティノープルに守備隊のいないことを知ったアレクシオスは、7月24日夜内通者を得て城内に入り、なんなく占領した。翌日ヴェネツィア艦隊は黒海から急ぎ帰ったが、アレクシオスは海沿いの家に火を放って反攻の無駄なことを教えた。艦隊は、皇帝・ポデスタ・総大司教パンタレオーネ・ジュステ

ィニァーニら3千人を救ってネグロポンテに向かうほかなかった。かくてラテン帝国は1261年7月26日、57年で幕を閉じた。

2.2 クルツォラ海戦まで(1261-1299)

こうしてヴェネツィアとジェノヴァの立場はまさに逆転した。といっても、それでヴェネツィアが全てを失ったわけでは全くなかった。ギリシァでこそ領地として残ったのはモドーネとコローネだけとなったが、島々やレヴァンテ海域各地の基地と港はそのままだったし、それらをつないで東地中海全域に張りめぐらされた商業網はもはや揺るぎないものだったからである。この後ヴェネツィアは、コンスタンティノープル再征服を横目で睨みながら、大きく変化する国際情勢の中でさらに発展を続けてゆく。コンスタンティノープルでも7年後には早くもギリシァ政権と条約を交わし、元の状態に復帰する。しかしかつての圧倒的地位は失っており、とりわけ黒海や小アジアでのジェノヴァの優位を覆すことはできないままに終わる。

13世紀後半、地中海での諸勢力の力関係は大きな変化を見せる。神聖ローマ帝国は、フェデリーコ2世(1250)とさらにその子コンラード4世(1254.5.21)が相次いで没し、後継の嫡出子を欠き大空位時代(1254-73)となっていた。そのため危機に陥っていた南イタリアとシチーリァはしかし、フェデリーコ2世の庶子マンフレーディ(1258-66)によって回復された(1258.8.10)が、次の教皇ウルバヌス4世はこれを認めず、彼に対する十字軍を宣言し、その手からイタリアを解放すべくフランス王ルイ9世の弟シャルル・ダンジュー(1266-85)に遠征を要請した。1266年(2.26)ベネベントでマンフレーディに勝利したシャルルは、プーリァとシチーリァの王となり、さらに1268年には、これに対して南下してきたフェデリーコ2世の孫コンラード5世（コッラディン）をもタリァコッツォで破った(8.23)。こうしてイタリアでは神聖ローマ帝国勢力、とりわけホーエンシュタウフェン家の支配に終止符が打たれる一方、それに代わってフランス、とりわけアンジュー家の勢力が大きく伸び、その後しばらく地中海世界は彼らを中心として展開することになる。北イタリアで

も、ヴェローナを除いてマントヴァ、フェッラーラ、ボローニャ、パドヴァ、トレヴィーゾがその側に付いた。野心家のシャルルはこうしたイタリア支配に満足せず、兄のルイ9世の支援を得てイタリアからギリシャにまたがる地中海帝国、かつての東ローマ帝国の再現を目論んでいた。

ジェノヴァもそれに乗る。コンスタンティノープルの新ポデスタ・グリェルモ・クェルチォはシチーリァ王となったシャルルとラテン帝国復活の陰謀を練った。ヴェネツィアもそれを座視していることはなかった。何をするにも海軍力を必要とするシャルルと交渉し、復興のあかつきには帝国における特権を復活することと引換に支援を請け合った(1267.5)。が、この時はその計画はすぐには実現しなかった。それを見てヴェネツィアは1268年、皇帝ミカエル8世と休戦条約を結び、ロマーニァからヴェネツィア人を排除していたニンフェォ条約の条項は撤回された。ビザンティンもジェノヴァを抑えるにはヴェネツィア人を導き入れる他なかったし、やはりその商業力は自国にとっても捨て難かった。この条約により皇帝はヴェネツィア人に黒海地域に定住することを許可した。これでヴェネツィア人は、1261年以前の経験を生かして、ソルダィアを前進基地として、南ロシアやジョルジャやコーカサスにまで進出した。しかしジェノヴァもその頃(1270-75)には、クリミアのモンゴル・カンから譲り受けたカッファを基地として進出し、ここでも両市の競争は激しさを増した。

ネグロポンテ、クレータ島、コローネ、モドーネ、ギリシャ南部とペロポンネソス半島、つまりロマーニァの南と西ではヴェネツィアが優勢だったが、ジェノヴァはコンスタンティノープルのペラ地区、黒海のカッファ、乳香で有名なキオス島、明礬のフォチェーアと、北と東で優勢だった。また黒海はかつてはビザンティン政府によって厳しく禁じられていたのが、1204年の征服以降進入が可能となっていたが、1241年からのモンゴル人の進出でさらに重要性を増していた。黒海の西岸と北岸は多量の穀物を輸出するだけの余裕があったのと、東方産品の輸送が、イスラムの手に握られた南東海上ルートに対して中国からの内陸ルートで可能となってきたからである。それにともなってロシアへの道が開かれ、ライアスとトレヴィゾンダがそこへの出入り

口となっていた。ペルシャにもまた1258年、敵対的なイスラム人に代わって、伝統的に商業と外国人に寛容な遊牧の民モンゴル人の政権(イル・カン国)が誕生していた。これで、インドからイスラム諸国を経ずして陸路トレヴィゾンダ、そして黒海を経てコンスタンティノープルへのルートが可能となった。

1277年には帝国領土内での関税の撤廃を獲得し、コンスタンティノープルのヴェネツィア人区も再建された。こうしてラテン帝国崩壊以前の元の状態に戻ったが、かつてのごとき圧倒的優位は取り戻せなかった。その間にもジェノヴァとはテサロニカ(1262)、モレーア(1263)、トラパニ(1264,65,66)、アークレ(1267)と各地で小競合いは絶えなかった。

ともかくも東地中海ではヴェネツィアの方がまだ優位にあり、和平の用意もあったが、ジェノヴァは海賊行為や急襲で利益を挙げていたのでそれを望まなかった。またも計画した十字軍のため船を必要としフランス王ルイ9世は1270年、ヴェネツィア船を襲うのを止めなければフランス国内のジェノヴァ人を追放し、財産を没収するとジェノヴァを脅かし、また十字軍士輸送のために豊富な資金を提供した。しかたなく両市は同年(8.27)クレモーナで、相互の勢力海域を定めて休戦条約を結んだ。ピーサも同様だった。

こうして海上での遠くの強敵ジェノヴァとは一応の和平状態を保ったが、一方近くの諸市との争いが続発した。アンコーナ、フェッラーラ、ボローニァ、イストリアで、原因はそれぞれだったが、基本的にはアドリア海とりわけヴェネツィア湾内と内陸部ポー川流域におけるヴェネツィア商業の独占に対する反発だった。

内政でも貴族派と庶民派（非貴族層）の対立が続いた。ラニェーリ・ゼーノ(-1268.7)の後、ドージェはロレンツォ・ティェポロ(1268-1275)、イァコポ・コンタリーニ(1275-1280.3)、ジォヴァンニ・ダンドロ(1280-89)と代わり、次にカーポディストリアのポデスタだったピェトロ・グラデニーゴ(1289-1311)と続いて貴族層から選ばれたが、庶民はロレンツォの子イァコポ・ティェポロを自分たちで選んで不満を表明した。この動きに危険を感じた新ドージェは、8年後に大評議会の非選挙権を貴族に限り、その体制を固めることになる。

1281年クレータ島でまたもや反乱が起き、その鎮圧のためにもコンスタンティノープル再征服を考えたヴェネツィアは、教皇マルティヌス4世が間に立って同年7月3日オルヴィエートでシャルル・ダンジューと二度目の条約を交わした。条件は、アンジュー家の地中海帝国建設を支援する代わりに、帝国内でのかつてのごとき特権を全て認めることだった。15隻のガレー船と10隻の運搬船の提供が定められた。ところが翌年メッシーナからの出発も迫っていた3月(1282.3.31)、シチーリァの晩鐘事件でシャルルは同島から追い出され、またもや彼の壮大な野心は挫かれた。自国の権利を危ぶむジェノヴァ人からこの出来事を知らされたギリシァ皇帝ミカエルは、シチーリァのギベッリーニおよびアラゴン王と通じて、クレータ島で反ヴェネツィアの動きをさらに煽った。8月末にはアラゴンのペドロ3世がシャルルの軍をシチーリァから追い払った[18]。こうしてイタリアは、スペインというもう一つの外国勢力の手にも握られることとなった。

この時からジェノヴァとの争いはさらに激しくなる。ジェノヴァはビザンティン帝国内での地歩を固め、織物の染色になくてはならぬフォチェーアの明磐を独占し、とりわけアナトリアと黒海に進出した。また1284年、メローリァの海戦で長年のライヴァルだったピーサを破って西地中海での優位を確立し、背後の憂いを取り除いていた[19]。

一方シリアは、ペルシャを征服し(1258)イル・カン国を建設したフラグのモンゴル人の進軍をアインジャールートで止めた(1260)新興のエジプト政権マムルークに圧迫されつつあった。彼らによって1291年(5.18)にはアークレが陥落し、かくて十字軍の時代は終わった。さらに続いてベイルート、テュロス、シドン、トルトーサと全て失い、残るはキプロスのみとなった。これにより、アークレに代わって小アルメニアのライアスとキプロスの首都ファマグスタがシリア交易の中心となった。この敗戦を憂えて教皇ニコラス4世はエジプト支配下にある地域との交易、とりわけ武器・鉄・木材・瀝青・船・奴隷の輸出を禁じた。が、いつものごとく守られることは少なかった。また、かくてヴェネツィアとジェノヴァの利害は全てビザンティン領域に集中し、とりわけ黒海貿易を独占しようと争った。それまでヴェネツィアはイル・カ

ン国と、ジェノヴァはキプチャク・カン国と結んで棲み分けていたのに対して、1291年ヴェネツィアは黒海の奴隷貿易に参入すべくキプチャク・カン国のノガイと通商条約を結び、かくて両者の勢力範囲は衝突した[19-1]。

さっそく1293年7月コローネ沖でヴェネツィアがジェノヴァ商船を攻撃して見せかけの休戦は破れ、第二次ジェノヴァ戦争に入る。まずはクレモーナで外交交渉がもたれたが失敗、翌1294年春ヴェネツィアは、多くのガレー船に伴われた船団をキプロスと小アルメニアに派遣し、1258年のアークレでの勝利を再現しようとした。キプロスのリマッソルのジェノヴァ植民地を襲い、ライアスでも1隻のジェノヴァ船を略奪した。これを知ったジェノヴァはペラからニコリーノ・スピーノラ指揮下の艦隊を派遣し、不意を突かれたヴェネツィア隊はライアス沖で全滅した。

これに味を占めてジェノヴァは1295年165隻の大艦隊を組んでメッシーナまで来、ヴェネツィアも艦隊を組んだが挑発には乗らなかった。1296年にはカネーアでヴェネツィア人がジェノヴァ人を略奪し、モドーネ沖ではヴェネツィア船が襲われた。そこでヴェネツィア人隊長ルッジェーロ・モロジーニはカッファとフォチェーアを略奪し、ペラのジェノヴァ人区を攻撃し、金角湾に停泊して威嚇した。ジェノヴァはお返しにコンスタンティノープルのヴェネツィア人区を襲って放火した。このおり、ヴェネツィアのバイロ（代官）マルコ・ベンボはアンドロニコス2世に捕えられて殺され、財産も没収された。これでヴェネツィアはビザンティンとも戦争状態に入った（休戦は1302年）。

1298年になると決戦を決意したジェノヴァが大艦隊を派遣し、アドリア海にまで乗り入れてき、隊長ランバ・ドーリァはダルマチア沿岸を荒らして挑発した。今度はヴェネツィアも受け、9月8日クルツォラ島沖での決戦となった。ヴェネツィアの95隻に対してジェノヴァ85隻、ドーリァはその内15隻を島陰に隠しておき背後から敵を挟み撃ちにするという、メローリァ海戦でピーサに勝利したのと同じ戦法を採ったと言われる。ヴェネツィアは18隻が沈没し、66隻が海岸で焼かれ、7000人余が捕らえられてジェノヴァに連れてゆかれた。その途中、マストに縛り付けられた隊長、ドージェの子アンドレーア・ダンドロは甲板に頭を打ちつけて自殺した[20]。

ジェノヴァの海軍力はそれほど絶頂期にあり、船の性能においても操船の技術においても彼らの方が優っていた。しかし、この戦での彼らの損害も大きく、ヴェネツィア湾にまで攻め上って、ピーサの場合のように止めを刺すことはできなかった。一方ヴェネツィアは翌年すぐ新艦隊を建造し、ヴェネツィア人海賊の一人ドメニコ・スキァーヴォはモナコの基地から何隻かを率いてジェノヴァに向かいその港でサン・マルコ貨幣を鋳造して挑発した。

翌1299年5月25日には皇帝派のミラーノのマッテオ・ヴィスコンティ(1287-1302, 1311-22)の介入で和平が結ばれた[21]。ジェノヴァにとってはそのミラーノが背後に迫ってきていたのと、グェルフィとギベッリーニの争いで内政が混乱し、体制が不安定だったことがあった。ギベッリーニを率いるドーリァとスピーノラはグェルフィを追放し、彼らの財産を没収したのに対して、グェルフィの頭だったフランチェスコ・グリマルディはモナコに移って権力を握っていた。そこに目をつけてヴェネツィアは、この反対派グェルフィと同盟して揺さぶった。休戦条約は全く対等なもので、ティッレーニァ海とアドリア海という互いの勢力範囲を尊重する一方、黒海での航行と通商の自由は相互に認めるという、ヴェネツィアにとっては願ってもないものであった。

3 千三百年代

1200年代がヴェネツィアにとって目覚ましい大発展の世紀であったとすれば、1300年代はその発展を維持しつつ体制を固め、また海から陸へと方向転換を計った世紀であった。ヨーロッパの一大勢力となったヴェネツィアは、海では宿敵ジェノヴァとの激しい争いのすえ2度の決戦を経て最終的に勝利するが、今度はオスマン・トルコという新たな強敵の登場を見ることになる。陸では本土の諸勢力・諸都市との争いはもはや避けられないものとなり、ヴェローナやパドヴァとの争いを経て、翌世紀始めにはヴェネト地方一帯を領有する一大陸上国家となる。内部では、歴史に残る二つの謀反事件やキオッジァ戦争を経て、寡頭貴族体制をますます強固なものとしてゆく。以下、主な出来事をごく簡単にたどる。

3.1 ペストまで(1300-1348)

クルツォラ海戦前年の1297年、共和国は「セッラータ」(Serrata 封鎖)と呼ばれるマッジォル・コンシーリォ(Maggior Consiglio 大評議会)のロックアウトを行った。つまり、大評議会議員の有資格者を過去4年間に議員になったことのある者に限るというものであった。これにより大評議会のメンバーは約900人となった。有史以来実質的に寡頭的貴族支配を行い、シニォーレ(領主)の出現を厳しく警戒してきたヴェネツィアは、その体制をこうして固定することによって、民衆の力と結びついたシニォリーアへの移行を全く排除してしまった。ほとんどがシニォリーアからさらにプリンチパート（君主制）へと移行しつつあった他都市・国家の動きとは異なったが、その後の繁栄とこの体制が最後まで維持されたことからすれば、それがヴェネツィアという特異な国にとっては最適のものであったことになる。

前世紀と比べて圧倒的に多くまた激しくなるのは、本土の近隣都市や諸勢力との争いである。1303-4年には塩をめぐってパドヴァと争ったし、エステ家のシニォリーアとなったフェッラーラは前述1240年以来の同市のヴェネツィア支配に反発し[22]、関係が悪化した。フェッラーラは1308年(1月)エステ侯アッツォーネ3世の死とともに後継争いが起こり、相続人に指定された庶出の息子フレスコの要請に応じて、ヴェネツィアは同市を占領した。遺言に異を唱える侯の弟たちはクレメンス5世に訴え、教皇はフェッラーラの宗主権を主張して、1309年3月27日ヴェネツィアに対して10日以内に撤退するかさもなくば宗務停止か破門に処すると通告し、他都市にはヴェネツィアとの通商を禁じた。ヴェネツィアでは意見が分かれ、本土への領土拡張を狙うドージェ・ピェトロ・グラデニーゴやダンドーロら領土派と、破門が商売に影響を及ぼすことを恐れて本土との係争と教皇との対立を避けたいティェポロやクェリーニの商業派とに分裂した。その後対ヴェネツィア十字軍が形成され、パドヴァ、フィレンツェ、アンコーナ、ルッカ他がこれに加わった。結果は後者の予想どおり、商業の停滞を呼んだ。フェッラーラのヴェネツィア駐留軍は、

教皇がイタリア全土から召集した軍に包囲されて全滅した。

この出来事は思いがけない形となってはね返る。フェッラーラ政策の失敗を非難し、ギベッリーニだったドージェに対して市のグェルフィ勢力が集まり、教皇への忠誠を誓い、ドージェ打倒を叫んだ。彼ら民衆派のリーダー、バィアモンテ・ティェポロ（イァコポの弟）とマルコ・クェリーニ、それにパドヴァに大所領を有し同市のグェルフィと関係深かったバドエロ・バドエル（バドエルはかつての名門パルテツィパツィオ家の改姓名）の三人が首謀者となって1310年6月15日未明決起した。

ヴェネツィアの歴史がもった初めての本格的な反乱ではあったが、計画はすでに漏れており、その日嵐のせいもあって連携がうまくゆかずすぐ発覚し、失敗した。そもそもあの狭い潟の町に秘密というものは保たれ得なかったし、また人一人通るのがやっとというあの狭いカッレ(calle 路)では大軍を動かすことは無理で、外からのみならず内からもヴェネツィアを攻めることの難しいことを示した。クェリーニは戦死し、パドヴァ郊外のペガラの所領地に結集したバドエル隊もヴェネツィアに向かって進んでいるところをキオッジァのポデスタだったウゴリーノ・ジュスティニァーニに捕らえられた。バドエルがヴェネツィアに連行されて処刑された(6.22)のに対して、ティェポロは追放処分になったが、その後も撹乱の動きを止めなかった。この事件処理のため形成された「コンシーリォ・ディ・ディェチ」（十人委員会：10人の委員とドージェと6人の各区のコンシリェーリからなる）はその後恒久的なものとなり(1335)、実質的に市の最高意志決定機関としての役割を担ってゆく。

ドージェ・グラデニーゴは事件すぐ後の8月に死亡、聖者と呼ばれたマリーノ・ゾルジ(1311-12)の1年をはさんで、対ジェノヴァ戦の闘将だったジォヴァンニ・ソランツォ(1312-28)が後を継いだ。1313年には、外交努力が実って10万ドゥカーティの金貨と引換に十字軍宣言と破門を撤回してもらったが、敗北であることは変わりなかった。が彼は諸外国、小アルメニア、タブリーズのカン(1320)、エジプトのスルタン、トレビゾンダのギリシァ人皇帝(1319)らと条約を結び、交易を促進した。ビザンティンに対してはまたもやフランスのアンジュー家によるラテン帝国復興の動きがあったが、成功しなかっ

た。黒死病までのこの14世紀前半は、ヴェネツィアが経済的・軍事的に最も発展し、繁栄と平和を享受できた時期だったと言われる。

しかしこの時期、ヴェネツィアの将来を予徴するような二つの出来事が起こっている。

一つは、ついに本土に本格的な領土をもったことである。それまでヴェネツィアは内陸部に領土を保有しない方針を原則とし、事実本土領はグラードからキオッジァまでの海岸線の狭い帯状の土地に限られていた。また対本土政策は、近隣コムーネやシニォリーアと良好な外交関係を維持し、市の商品の流通を妨げるような強力な国家の誕生を阻むことだった。その危惧はヴェローナのシニォーレでギベッリーニのリーダー、カングランデ・デッラ・スカーラ(1311-29)の登場によって現実のものとなる。彼はフェルトレ、ベッルーノ、ヴィチェンツァ、パドヴァと征服、1329年にはヴェネツィアのまさに対岸メストレに税関を設置した。さらにその息子マスティーノはパルマ、ブレーシァ、そしてトスカナのルッカまで掌中にし、スカーラ家を北伊の一大勢力とした。また、河川の航行を脅かし、ヴェネツィアの塩の独占を崩した。

一方パドヴァでは1318年、ドージェ・ピェトロ・グラデニーゴの娘婿イァコポ・ダ・カッラーラがシニォーレとなっていた。その後を継いだ孫のマルシーリォはカングランデによって位を奪われたが、代理としてそのまま残り、ヴェネツィアとの交渉には彼が当てられた。そこでヴェネツィアは、ルッカの欲しいフィレンツェと同盟して、ヴェネツィアに対する経済的保証と防衛の義務と引換に、マルシーリォにパドヴァの他モンセリーチェ、エステ、カステルバルド、チッタデッラ、バッサーノの領有を認めることを密約して、カングランデに反乱させた。ヴェネツィアにはトレヴィーゾと周辺の領有を認めさせた。フィレンツェにはペーシァ、ブッジァーノ、コッレなどの小村ばかりでルッカが与えられなかったため関係は悪化し、敵意はその後も長く残った[23]。

かくてヴェネツィアは1339年、初めて本土にトレヴィーゾという本格的な領土を所有することとなった。初代ポデスタにはマリーノ・ファリェルが就いた。それは、建国以来の孤立政策の放棄を意味し、本土部への新たな大勢

力の出現を告げるものとしてイタリア政治に大きな反響を呼んだ。

もう一つは逆に、海上でのオスマン・トルコの出現である。すでに彼らは常にレヴァンテ海域に姿を現すようになっていた。その海賊に対するためオピタル騎士団がロードス島におかれ、1344年歴史家としても著名な統領アンドレーア・ダンドロ(1343-54)の時、反トルコ同盟を結成してズミルナ（イズミル）を征服した。陸上でもこの頃ビザンティンで内紛があり、皇帝ヨハンネス6世・カンタクゼノス(1347-54)はトルコ人を引き込んで、その危機を乗り切った。同じ頃、テサロニカ市民の反乱を鎮圧するのに皇帝はオスマン・トルコの支援に頼った。傭兵となった彼らはそのままそこに残り、ガッリーポリ、セルビア、ブルガリアと、バルカン半島を征服して行った。こうして将来の禍根を残した。この頃また、1322年に破門をもって禁じられていたエジプト貿易が教皇から解禁され、再びアレクサンドリア行きの定期便が出るようになった。黒海の商業活動を妨害していたキプチャク・カン国のタルタル人に対しては、ジェノヴァと同盟した(1344)。1345年にはザラが反乱し、今度の扇動者はハンガリー王となった(1342)ルイ・ダンジューで、彼はクロアチアの領土権を主張した。

1343年、ヴェネツィア人によって引き起こされた喧嘩がきっかけでタナの西方人がキプチャク・オルダのカンから追放されたおり、ジェノヴァ人はカッファにヴェネツィア人を受け入れた。が、ヴェネツィア人はそれに満足せず、直接タナと交易したため争いとなった。そして1348年、クリミア半島でのタルタル人との戦闘の最中に発生したとされるペストは、ヴェネツィアにも真っ先に上陸した。市では人口の3分に1から半分が死亡したと言われる。この頃の人口約12万人として、4万から6万が失われたことになる。国力の衰退と商業の一時的停滞は避けられなかったが、それはヨーロッパのどこでも同じだった。

3.2 陸上帝国まで(1348-1405)

そんな中で第3次ジェノヴァ戦争が起こる。まずジェノヴァがカッファでヴ

ェネツィア船を拿捕した。そこで1350年(8･6)ヴェネツィアはジェノヴァに対してマルコ・ルッツィーニを隊長とする遠征隊を出した。カストロ港で14隻のジェノヴァ商船を略奪している間に、ジェノヴァはネグロポンテを襲った。ハンガリー王、アクィレィアの総大司教、オーストリア公らによる包囲網を恐れたヴェネツィアは、アラゴンのカタラン人と同盟を結び、その支援の下にティッレーニァにまで侵攻してサルデーニァのアルゲーロでジェノヴァの艦隊に勝利した。ジェノヴァはこの頃、ボスフォロスの南岸とマルマラ海を支配するようになっていたトルコのオルクハン1世から補給を得ていた。これを見て、トルコの脅威を身近に感じるビザンティンはジェノヴァから離れ、ヴェネツィアに接近した。しかもジェノヴァは対ヴェネツィア戦への軍事的・商業的支援と引換に、市のシニォリーアを背後の敵であるミラーノのジォヴァンニ・ヴィスコンティ(1342-54)に提供した。この世紀始めから急速に上昇してきたヴィスコンティのミラーノは、ロンバルディーア、ピエモンテ他北伊の大部分を支配下に収めて一大勢力となっていた。その支援の下にパガニーノ・ドーリァのジェノヴァ艦隊はヴェネツィア湾深く入り込み、イストリァ市を襲った。さらに1354年11月4日、ヴェネツィアのニコロ・ピサーノ隊はモドーネ近くのポルトロンゴで急襲されて全滅した。こうして第3次ジェノヴァ戦争はヴェネツィアの敗北に終わった[24]。

次のドージェ・マリーノ・ファリェル(1354-55)は、「ドージェの陰謀」の主人公として名高い。言い伝えによれば、この老ドージェは個人的な恨みもあって貴族層に敵意を抱くようになり、ジェノヴァ船到来を叫んで大評議会を集めて皆殺しにし、民衆を決起させて権力を奪取し、自らヴェネツィア公となる計画を練った。ところが1355年4月15日の決起前夜計画が漏れ伝わり、自分がその張本人であることが暴露されて、ドージェ宮内で斬首されて終わった[25]。ヴェネツィアで個人が権力を奪取すること、市を軍事力で制圧することがいかに難しいかが再び証明された。

この後もヴェネツィアは外交戦略を用いてヴィスコンティに接近し、北伊の同盟都市とくにヴェローナの敵対をちらつかせて1355年の会議で和平を結んだ。同年6月1日ジェノヴァとの和平が結ばれ、黒海通商からの一定期間の

活動停止と、それぞれの勢力範囲の線引きが決定された。しかしジェノヴァはミラーノに反旗を翻し、自らドージェ・シモン・ボッカネグラを選んで、ダルマチアを攻撃した。またハンガリー王は先年ヴェネツィアの領有に帰していたトレヴィーゾに侵入し、ダルマチアとの交換を要求してきた。ダルマチアの宗主権はヴェネツィアにあったが、ドージェ・ジョヴァンニ・ドルフィン(1356-61)はその支配の困難なことを省み、トレヴィーゾの保全と交換にこれを譲渡した(1358)。また、再びヴェネツィアに対立し始めていたパドヴァのフランチェスコ・ダ・カッラーラとも和平し、塩の製造を認めた。パドヴァとは1368年またもや軍事衝突に至ったが、1373(10.2)には息子フランチェスコ・ノヴェッロがペトラルカに伴われてき、ドージェ・アンドレーア・コンタリーニ(1368-82)の前で跪いて和平を乞うた。

ジェノヴァとの争いは黒海、アナトリア、エーゲからキプロスにまで広まっていたが、ついに雌雄を決するまでにいたる。発端は1373年ジェノヴァの支配下にあったキプロスのピェール・ルジニァン2世の戴冠祝いの折り、ファマグスタで両市民の喧嘩が起こったことだった。ジェノヴァはすぐ大軍を送って首都を占領し、王を捕らえて賠償を要求したが、ヴェネツィアは前述のパドヴァ戦に手を取られて派遣できなかった。もう一つ、ダーダネルス海峡入り口を扼する要衝テネドス島の帰属問題が絡んでいた。ビザンティン側の態度ははっきりせず、6年前ヨハンネス・カンタクゼノス5世が借金の抵当にヴェネツィアに与えていたこの島を、父を退位させて帝位に就いたアンドロニコス2世は1376年ジェノヴァに与えた。しかし後に、この頃東地中海で活躍していたヴェネツィアの隊長カルロ・ゼーノによって取り戻された。

これで衝突は不可避となり、今度は他の勢力も巻き込まずにはおかなかった。パドヴァは早くも反旗を翻し、アドリア海東岸ダルマチアの支配を固めたハンガリーはあわよくばヴェネツィアそのものを、オーストリアはトレヴィーゾを、アクィレィアはグラード、トリエステ、イストリァを狙ってジェノヴァと同盟した。一方ヴェネツィアは、ジェノヴァの支配から逃れたいキプロスと、ジェノヴァに裏切られたミラーノのヴィスコンティと同盟した。

1378年4月24日宣戦がなされ、ヴェネツィアの提督はヴェットル・ピサー

ニだった。戦力に優るジェノヴァはアドリア海を北上し、まずルチァーノ・ドーリァ隊がポーラ沖でヴェネツィア船団を破り、リド沖にまで迫った。この敗戦でピサーノは投獄され、タッデオ・ジュスティニァーニに指揮が委ねられた。対岸ダルマチアにはハンガリー軍があり、本土からはパドヴァが包囲網を狭めつつあった。もう一方のピェトロ・ドーリァ隊もグラード、カオルレ、ペッレストリーナ、ソットマリーナと湾沿いに制圧し、1379年8月6日にはついにキオッジァが陥落した。これはヴェネツィアの領土が外国勢力に占領された初めてのことだった。全く孤立したヴェネツィア本島の運命ももはやこれまでと思われた。が、もともと遠洋航海者であるジェノヴァ人が潟の浅瀬に不案内だったのも幸いした。9月13日サン・マルコで全市民の集会がもたれ、軍の指揮は、海人の父と慕われたが先のポーラでの敗戦の責任を問われて獄中にあったヴェットル・ピサーニの手に委ねられた。彼の作戦はキオッジァを本土のパドヴァ軍とも沖のジェノヴァ軍とも切り放すことで、そのため浅瀬の潟を障害物で埋め、支援が届かないようにした。こうして12月、キオッジァを占領していたジェノヴァ軍が海上から逆封鎖された。そこへ名高いヴェネツィアの提督カルロ・ゼーノが翌1380年1月1日18隻の援軍を率いて到着し、ヴェネツィアは優位に立った。孤立したキオッジァのジェノヴァ軍は兵糧攻めにされ、隊長アンブロージォ・ドーリァをこの戦争で本格的に用いられた大砲で失い、6月24日降伏、4500人が捕虜となって終わった。

ヴェネツィアは、トレヴィーゾがパドヴァのカッラーラの手に渡るのを阻止するため、1381年5月調停に立ったオーストリア公にこれを譲渡した(1409年に取り戻す)。8月8日トリーノのサヴォィア公のもとで両市の他パドヴァ、ハンガリーの間で和平が調印され、ヴェネツィアはハンガリー王へのダルマチアの決定的な譲渡、ドン河口とダーダネルス海峡・テネドス島の中立非武装化を認めさせられたが、その他の海外領土は全て保全された。その他タナでの両市の商業停止、キプロスにおけるジェノヴァ人の特権などを承認させられたが、実質的に失うもの少なく、内部ではかえって結束と体制を固めた。これに対して敗れたジェノヴァは、内政の分裂を重ねて決定的に衰退してゆき、フランスとスペイン、ミラーノとサヴォィアらの外国勢力の支配下に置

かれて、ついには独立を失うにいたる。

こうして第4次ジェノヴァ戦争（キオッジァ戦争）で長年の宿敵ジェノヴァが海上から姿を消すにつれて、陸上ではヴィスコンティのミラーノが伸長してくる。ロンバルディーア全体を征し、ボローニァ、フェッラーラにまで進出してきたこのヴィスコンティの都市がパドヴァと結びつくことをヴェネツィアは恐れた。

パドヴァのシニォーレ・イァコポ・ダ・カッラーラはなお拡大路線を取り、オーストリアからトレヴィーゾ、コネリァーノ、チェネーダ、セッラヴァッレ他ヴェネト地方一帯を買い取り(1384-6)、2年後にはフェルトレとベッルーノも買い取った。彼はこうして着々とヴェネツィア包囲網を敷き、フリウーリまで狙っていた。その上西ではミラーノのジァンガレアッツォと結んでヴェローナ分割を計った。ところがミラーノは約束に反してヴェローナとヴィチェンツァを独り占めにした。そこで1388年5月、この機を狙ってヴェネツィアはミラーノと同盟し、パドヴァを挟み撃ちにしてミラーノ軍が同市に侵入して占領、トレヴィーゾ、コネリァーノ、チェネーダ、カステルフランコはヴェネツィアが獲得した。

しかしヴェネツィアは、今度は間近に迫りすぎたミラーノの脅威を遠避けるためフィレンツェおよびボローニァと協議して、イァコポの子フランチェスコ・ノヴェッロを支援して1392年パドヴァをミラーノから取り戻させた。パドヴァ市民はこれを歓迎し、ノヴェッロも感謝した。

ところがペルージァ、シェーナ、ボローニァと征服し、フィレンツェに迫っていたミラーノのジァンガレアツォ・ヴィスコンティが、1402年(9.3)突然没した。未亡人はパドヴァとの同盟を探り、ベッルーノ、バッサーノ、フェルトレの提供をノヴェッロに申し出た。ヴェネツィアはこの申し出を受けるよう助言したが、野心家のノヴェッロはフェッラーラのエステ家と同盟して、ミラーノそのものを狙って1403年ロンバルディーアに侵攻し、失敗した。それでもノヴェッロはヴェローナを取り、ヴィチェンツァをも狙ったため、ヴィチェンツァはヴェネツィアに自らを提供した。かくてヴェネツィアと敵対するはめとなったノヴェッロは和平交渉の道を探ってきたが、もはや彼を見

限ったヴェネツィアは、最後通牒を突きつけて1405年11月22日パドヴァに侵攻して占領した[26]。

こうして一連の戦争が終わってみると、ヴェローナ、ヴィチェンツァ、パドヴァ、トレヴィーゾ、ロヴィーゴ、ベッルーノ、フェルトレ、チェネーダと、ヴェネト地方全体がヴェネツィアの領有に帰していた。ヴェネツィアはそれらの市に自治を認め、ポデスタ（行政長官）とカピターノ（軍事長官）を派遣した。かくてヴェネツィアはイタリアにおける最大の領域国家、すなわち陸の帝国としても存在することとなった。この頃はまた、コムーネの時代が終わり、イタリア各地に強力なシニョリーアやプリンチパートが誕生しつつある時代であった。

【註】

1. 主に下記の書を参照した（末尾[　]内略称）。

1) Frederic C. Lane, *Storia di Venezia*, Torino Einaudi 1978 (Johns Hopkins Univ. Press 1973). [Lane]

2) Alvise Zorzi, *La Repubblica del Leone, Storia di Venezia,* Milano Rusconi 1989 (1979). [Zorzi]

3) *Storia della Civiltà Veneziana,* vol. I, a cura di Vittore Branca, Firenze Sansoni 1979. [S.C.V.]

4) *Storia di Venezia*, vol. II, a cura di Giorgio Cracco e Gherardo Ortalli, Roma Enciclopedia Italiana 1995. [S.V.]

5) Gino Luzzatto, *Storia Economica di Venezia dall'XI al XVI Secolo*, Venezia Marsilio 1995 (1961). [Luzzatto]

6) Yves Renouard, *Le Città Italiane dal X al XIV Secolo*, Milano Rizzoli 1975 (1969). [Renouard]

7) W.H.マクニール(清水廣一郎訳)『ヴェネツィア -- 東西ヨーロッパのかなめ, 1081-1797』岩波書店 1979 (Univ. of Chicago Press 1974). [ﾏｸﾆｰﾙ]

[2. 14世紀の手稿本『大年代記』にある地図を18世紀の建築家テマンツァが描き写したもの。原図は12世紀頃のものと推定される。東が上（ルカ・コルフェライ(中山悦子訳)『ヴェネツィ

ア』河出書房新社 1996, p. 7）。］

3. ちなみに、上掲(3)*Storia della Civiltà Veneziana*の第1巻は ‘Dalle origini al secolo di Marco Polo’「起源からマルコ・ポーロの世紀まで」と題されている。本稿では、ヴェネツィア史とマルコ・ポーロとの関連については全て次回第2章「年次考」で扱う。(　)内アラビア数字は西暦年（月日）を表す。人物の場合は在位期間。

4. これを選んだのは、本土から移住してきた貴族や執政官の子孫で、ヴェネツィアでは最も古いとされる家門。*Cronaca Altinate*によると、Badoer, Barozzi, Contarini, Dandolo, Falier, Gradenigo, Memmo, Michiel, Morosini, Polani, Sanudo, Tiepoloの12家系(Lane:26, Zorzi:24)。

5. マクニールは、技術史（特に軍事）的視点からその原因の一つを、地中海南岸アフリカ側では船舶用木材が得られなかったことに求めている(ﾏｸﾆｰﾙ:17)。

6. Cfr.拙稿「中世ピーサ年代記 - 12-14世紀を中心に」(1)《大阪国際女子大学紀要》23-2, 1997, pp.97-120.

7. マクニールは、これを地中海における騎士の時代の幕開けを告げるものとし、その書を1081年のこの出来事から書き始めている(ﾏｸﾆｰﾙ:7-8)。

8. アレクシオス1世コムネノスの娘アンナ・コムネノスの記事が名高い。

9. この折、大使として同地にあった後の第4回十字軍のヴェネツィア側立て役者エンリーコ・ダンドロは、皇帝の命により眼を打たれて失明した。

10. 伝説によると、この折アドリア海の支配権が教皇からヴェネツィアに与えられた(Lane:67)。

11. 地理的に近いため最初ジェノヴァが選ばれたが、同市はこれを断ったとも言われる。

12. 特に、ジョフロワ・ヴィルアルドゥワン（伊藤敏樹訳・註）『コンスタンチノープル征服記』筑摩書房 1998, ロベール・ド・クラリ（伊藤敏樹訳・解説）『コンスタンチノープル遠征記』筑摩書房 1995。ラムージォの「マルコ・ポーロの書序文」(2)は、これについての紹介の最も早いものの一つとして知られる(cfr.同拙訳《帝国学園紀要》18, 1992, pp.93-105.

13. ボニファーチォの宗主はホーエンシュタウフェン家のフィリップ（皇帝位をめぐって教皇の推すオットー4世と争った相手）、母も同家出身だった。ヴェネツィ

アは、ビザンティンと神聖ローマ帝国の両帝国がホーエンシュタウフェン家の勢力圏となり、それに挟み撃ちされることを恐れた。この点で教会側の思惑とも一致した。また、同モンフェッラート侯家の4男ルニェッロを、前帝マヌエル1世コムネノスは娘マリーアの夫に迎えていた。もう一人の兄コンラードはエルサレム王だったが、アッサッシン教団に暗殺された。

14. モドーネとコローネは、「アドリア海の入り口に睨みをきかす共和国の両眼」とも呼ばれ、レヴァンテから帰る船は全てそこに寄港し、外地や海についての情報を提供したり得たりしなければならなかった(Lane:53)。

15. マヌエル帝の娘婿となった前述の兄ルニェッロがサロニカ領有を約束されていたが、直後に殺されたため。

16. このドージェ・ピェトロ・ジァーニ(妻はシチーリァ王タンクレーディの娘)が提案したというコンスタンティノープル移住説(1224)は伝説。歴史家Daniele Barbaroによると、大評議会で1票差で否決された(Zorzi:121, S.V.:215)。また彼の1228.9.2付遺言は、その頃最大の富豪だったZiani家の富がどのようにして形成されていったかを示す貴重な史料として知られる。その中に、父のSebastiano(ドージェ 1172-78)が1153年Enrico Serziに1200リブラの胡椒を貸したこと、1174.10にはアレクサンドリアで1万リブラの胡椒を買うためRomano Mairanoに1千ヴェネツィア・リラを貸したこと、などの記事が見える(Luzzatto:21)。

17. このフィリップは、後にシャルル・ダンジューの娘ベアトリスと結婚し、シャルルの地中海帝国建設の野心のための一駒として利用される。

18. マクニールによれば、シチーリァ晩鐘の乱は地中海における騎士の優位の終わりを告げるもの。そしてフランク騎士に代わって弩兵の登場を見る(マクニール:51-3)。

19. Cfr.前掲拙稿「中世ピーサ年代記」(1).

［19-1. ノガイは、ジョチの第5子ボアルの子タタルの子で、西部領土右翼軍の最有力王侯。マルコ・ポーロ『世界の記』の最後「トクタイとノガイの戦い」（Ch. 228-233）に記される。］

20. 様々な敗因が伝えられる。ジェノヴァが降伏を申し出たのに対してヴェネツィアが無条件降伏を要求し、10隻を捕獲したが、急に風向きが変わって味方の艦隊

が混乱に陥った、など。

21. このマッテオの長男ガレアッツォが、フェッラーラのエステ家の娘でカリァリの国主ニーノ・ヴィスコンティの未亡人だったベアトリーチェ(32歳)と結婚した(1300)相手。

22. フェッラーラに出入りする船は全てヴェネツィアを経由すること、監視の城塞Marcamo城の建設(1258)などに対する反発(Lane:73,77)。

23. ゾルジによれば、当時のフィレンツェ人ヴィッラーニやボッカッチォの反ヴェネツィア感情はこれが原因(Zorzi:172)。Cfr. Villani, *Cronica*, vol. VI, libro II, cap. XC, pp.172-7.

24. ミラーノのシニォーレ、ジォヴァンニ・ヴィスコンティは、この時ドージェの友人でもあったペトラルカを使節として派遣し、外交的に解決しようと試みた。1354.6.5と13の往復書簡が残っている。

25. この事件は後世数多く劇化されている。シューマン、ドニゼッティ、ホフマン、バイロン、グリルパルツァーなど。レィンは、このドージェが高齢(80歳)のうえ跡取りの息子もないことからシニォーレへの野心については疑問視し、後世の年代記者による脚色とみる(Lane:218)。

26. 共和国ピーサの終末(1406)もこのパドヴァ戦争と密接に絡んでいる：
cfr.前掲拙稿「ピーサ中世年代記」(2), 1998, pp.165-6.

図4　ヴェネツィア市街図（中心部）（*Venezia*, Electaより）